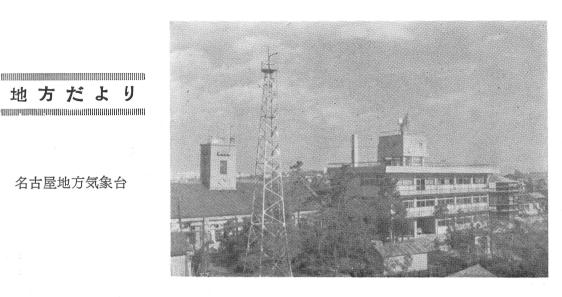
## 方だ 上

名古屋地方気象台



\*\*\*名古屋の地勢はまったく平面的で、立体感に乏しい。 わずかに市の東部が一応の丘陵地帯をなし、多少の起伏 がみられるにすぎない。 つまり、気象台の在るあたりが それである. 海抜51mというと市内でもかなり高い方, 日和山と称する台地の上に,延面積 1068 m2 を有する鉄 筋コンクリート3階建の明るく、スマートな庁舎が立っ ている。なんによらず新しいものはいいもので、一昨年 秋完成したばかりだから今のところまだ魅力はうせてい ない. さらに屋上には400kmの有効半径をもつ最新式レ ーダのアンテナが、あたりをヘイゲイして光っている.

このレーダーは、高感度で、しかも強力なアンテナ制 御系を持ち、等エコーや RHI 表示を持つ点など、ちょ っといばれるが、なんといっても全方向に亘って重大な 地形障害のほとんどない点有利である. はからずも名古 屋周辺の平坦な地勢がこんなところに幸いしている.

ところで、名古屋は古くから那古野、那古屋、名護屋 などと呼ばれた. また古図に浪越と書いてナゴヤと読ん だ例もあるらしいが、その語源については色々な説があ ってどうもはっきりしない. 正式に名古屋と定められる ようになったのは明治3年頃からのようである.

今日のような名古屋の市街ができたのは、慶長15年徳 川氏が名古屋城を築いてからのことである。関ケ原の役 の後、徳川家康は、その子義直を清洲に封じたが、この 地は低温で大水のはんらんするおそれがあった。 そこで 城を名古屋の地に移すことになり、慶長15年工事に着 手,大規模な城地を営んでここに移った。清洲の町民も 大方ここに移り、名古屋の新市街が経営されるようにな ったのである.

その後は徳川親藩の城下町として発展し、ことに8代 将軍吉宗と政策的に張り合った,尾張7代目の城主宗春 の積極的政策は、従来、地方の一都市にすぎなかった名 古屋を、京、江戸、大阪の三都にせまる商工業都市とし て発展させたのである.

以来幾星霜。どちらかといえば平安の夢をむさぼって きたといえよう。第2次大戦で丸裸になったとはいえ, それは名古屋に限らない. 名古屋の町をひっくりかえる ような大事は、やはり伊勢湾台風の時をもって最高とす

あの恐ろしい惨事を2度とくりかえしたくないという 県市民全体の願いは、必然的に台風に対して異常なまで に神経質になる。その当座しばらくは、台風発生のニュ ースとともに気象台に殺到する問い合わせの電話だけで 職員がいかになやまされたことか。最近になって一応落 ち着いたものの、他の気象官署にみられない気苦労があ る、当然、情報や注、警報の発表についても細心の留意 が要る。別にたいして災害を及ぼしたわけでもない台風 についても、情報発表要領のちょっとした手違いや、進 路予想の外れがあると、以前にみられなかったような思 わぬ "はねっかえり" がある。

それだけ関心が深くなったともいえようか? たしか に、防災対策は目にみえて進んできた。 市を含めて愛知 県下の防災に対する整備は、総合的におそく全国一とい っても過言ではないかもしれない.

でも、現場の予報者にとっては、何となく目にみえな い重荷を感ずるのはどういうものだろう. 伊勢湾台風時 の予報が割によく当ったという一般の与論が、かえって 気妙な負担となってのしかかってくるのを 否定できな い. もし, 今度. 外したならば………その反動が………

ノイローゼと笑うなかれ、あれ以来、名古屋地方気象 台の奥底深く、十字架にも似た影が宿っている。といえ ばおおげさであろうか。もちろんその影の存在を忘れて いる時の方が多いかもしれない。しかしまだ、たしかに 消えてはいない。

ともあれ、"尾張名古屋は城で持つ"という。戦災で 焼失したその城も見事に復元した. いつの日か "尾張名 古屋は気象台で持つ"といきたいもの。(佐藤藤平記)